

# 最後の胡弓弾き

新美南吉

青空文庫



## 一

旧の正月が近くなると、竹藪たけやぶの多いこの小さな村で、毎晩つづみ鼓の音おとと胡弓こきゅうのすすりなくような声が聞えた。百姓の中で鼓と胡弓のうまい者が稽古けいこをするのであった。

そしていよいよ旧正月がやって来ると、その人たちは二人ずつ組になり、一人は鼓を、も一人は胡弓を持って旅に出ていった。じようず上手な人たちは東京や大阪までいって一ひとつき月も帰らなかった。また信州しんしゅうの寒い山国へ出かけるものもあった。あまり上手でない人や、遠くへいけない人は村からあまり遠くない町へいった。

それでも三里はあつた。

町の門かどごとに立つて胡弓弾ひきがひく胡弓にあわせ、鼓を持った太夫たゆうさんがぽんぽんと鼓を掌てのひらで打ちながら、声はりあげて歌うのである。それは何を謡うたっているのやら、わけのわからないような歌で、おしまいに「や、お芽出めでとう」といつて謡いおさめた。すると大抵たいていの家では一銭銅貨をさし出してくれた。それをうけとるのは胡弓弾きの役目だったので、胡弓弾きがお銭あしを頂いただいているあいだけ胡弓の声はとぎれるのであつた。たまには二銭の大きい銅貨をくれる家もあつた。そんなときにはいつもより長く歌を謡うのである。

ことし十二になった木之助は小さい時から胡弓の音が好きであ

った。あのおどけたような、また悲しいような声をきくと木之助は何ともいえないうつとりした気持ちになるのであった。それで早くから胡弓を覚えたいと思つていたが、父が許してくれなかった。それが今年は十二になつたというので許しが出たのであった。木之助はそこで、毎晩胡弓の上手な牛飼うしかいの家へ習すいに通かよつた。まだ電燈がない頃ころなので、牛飼の小さい家には煤すすで黒い天井から洋燈ランプが吊つり下さがり、その下で木之助は好きな胡弓を牛飼について弾いた。

旧正月がついにやつて来た。木之助は従兄いとこの松次郎と組になつて村をでかけた。松次郎は太夫さんなので、背中に旭日あさひと鶴つるの絵が大きく画かいてある黒い着物をき、小倉こくらの袴はかまをはき、烏帽子えぼしをか

むり、手に鼓を持っていた。木之助はよそ行きの晴衣はれぎにやはり袴をはき、腰に握り飯の包みをぶらさげ、胡弓を持っていた。松次郎はもう二度ばかり門附かどづけに行つたことがあるので、一向平氣だつたが、始めての木之助は恥はずかしいような、誇らしいような、心配なような、妙な氣持だつた。殊ことに村を出るまでは、顔を知つた人たちにあうたびに、顔がぽつと赧あかくなつて、いつそ大きい風呂敷ふろしきにでも胡弓を包んで来ればよかつたと思つた。それは父親が大だいふ奮んぱつ發で買つてくれた上等の胡弓だつた。

二人が村を出て峠とうげ道みちにさしかかると、うしろから、がらがらと音がして町へ通つてゆく馬車がやつて來た。それを見ると松次郎はしめしめ、といった。あいつに乗つてゆこう、といった。

木之助はお錢あしを持っていなかったの、

「おれ、一錢もないもん」というと、

「馬鹿ばかだな、ただ乗りするんだ」と言つた。

馬車は輪鉄わがねの音をやかましくあたりに響かせながら近附いて来た。いつもの、聾つんぼの爺じいさんが馭ぎよ者台しゃだいにのつていた。それは木之助の村から五里ばかり西の海ばたの町から、木之助の村を通つて東の町へ、一日に二度ずつ通う馬車であつた。木之助と松次郎は道のぐろにのいて馬車をやりすごした。

馬車のうしろには、乗客が乗り下りおするとき足を掛ける小さい板がついていた。松次郎はそれにうまく跳とびついて、うしろ向きに腰をかけた。木之助の場所はもうなかったの、木之助は馬車に

ついて走らなければならなかった。胡弓を持つているし、坂道なので木之助はふうふう言いながら走ったが、沢山<sup>たくさん</sup>走る必要はなかった。

馬車は半<sup>はんちよう</sup>町もいかないうちにぴたとまってしまった。松次郎は慌<sup>あわ</sup>てて跳びおりた。ほっぽこ頭巾<sup>ずきん</sup>から眼<sup>め</sup>だけ出した馭者の爺<sup>むち</sup>さんが鞭を持つて下りて来た。

「おれ、知らんげや、知らんげや」と松次郎は頭をかかえてわめいた。しかし爺さんは金<sup>かなつんぼ</sup>聾<sup>ろう</sup>だったので何も聞えなかった。ただ長年の経験で、子供一人でもうしろの板にのるとそれが直体<sup>すぐ</sup>に重く感ぜられるので解<sup>わか</sup>つたのであった。「この馬鹿<sup>たた</sup>めが」といつて、鞭の柄<sup>え</sup>の方でこつんと軽く松次郎の耳の上を叩いた。そして



また馭者台に乗ると馬車を走らせていつてしまった。

松次郎は馬車のうしろに向つて、ペラリと舌を出す、

「糞爺くそじじいの金龔ふし」と節をつけていつて、ぽんぽんと鼓をたたいた。そして木之助と一しよに笑い出した。

二人が三里の道を歩いて町にはいつたのは午前十時頃ころだった。

## 二

町の入口の餅屋もちやの門かどから始めて、一軒一軒のき伝いに、二人は胡弓をならし、歌を謡うたつていつた。

一番始めの餅屋では、木之助はへまをしてしまった。胡弓弾き

はいきなり胡弓を鳴らしながら賑にぎやかにしきい鬨しきいをまたいではいつてゆかねばならないのだが、木之助は知らずに、

「ごめんやす」と言つてはいつていった。餅屋の婆ばあさんは、それで木之助を餅を買いに来たお客さんと間違えて、

「へえ、おいでやす、何を差しあげますかなも」と答えたのである。木之助は戸惑いして、もそもぞしていると、場なれた松次郎が、びっくりするほど大きな声で、明けましてお芽出とうつつくろといながら、鼓をぽぽんと二つ続け様にうってその場をとり繕つくろつてくれた。その婆さんは銭箱ぜにばこから一銭銅貨を出してくれた。木之助は胡弓を鳴らすのをやめて、それを受け取り袂たもとへ入れた。

表に出ると松次郎が木之助のことを笑つて言った。

「馬鹿だなあ。黙つてはいつてきやええだ」

それから木之助はうまくやることが出来た。大抵の家では一銭くれた。五厘りんをくれる人もあつた。中には、青く錆さびた穴あき銭を惜しそうにくれる人もあつた。二銭銅貨をうけとったときには木之助は、それが馬鹿に重いような気がした。しつかりと掌てに握つていて外に出るとそーつと開いて松次郎に見せた。二人は顔を見合わせほえんだ。

もうお午を少しひるすぎた。木之助の袂はずしんと横腹にぶつかるほど重くなつた。草鞋わらじばきの足にはうつすら白い砂すなほこり埃もつもつた。朝から大分の道のりを歩いたので腹が空すいていたが、弁当べんとうを使う場所がなかなか見つからなかった。もう少しゆくと

空地<sup>あきち</sup>があつたから行こうと松次郎が言うので、ついて行つて見る

とそこには木の香<sup>か</sup>も新しい立派な家が立っていたりした。

腹<sup>はら</sup>がへつては勝<sup>かち</sup>はとれぬから、もう仕方がない、横<sup>よこ</sup>丁<sup>ちよう</sup>にで

もはいつて家のかげで食べようと話をきめたとき、二人は大きい

門<sup>もん</sup>構<sup>がま</sup>えの家の前を通りかかった。そこには立派な門<sup>かど</sup>松<sup>まつ</sup>が立て

てあり、門の片方の柱には、味噌溜<sup>みそどまり</sup>と大きく書かれた木の札<sup>ふだ</sup>がか

かつていた。黒い板<sup>いた</sup>塀<sup>べい</sup>で囲まれた屋敷は広くて、倉のようなも

のが三つもあつた。

「あ、ここだ、ここは去年五銭くれたぞ」と松次郎がいった。で

二人は、そこをもう一軒すましてから弁当をとることにした。

木之助が先になつてはいつてゆくと、

「う、う、う……」と低く唸る声<sup>うな</sup>がした。木之助はぎくりとした。犬が大嫌<sup>だいきら</sup>いだっただのだ。

「松つあん、さきいつてくれや」と松次郎に嘆願すると、

「胡弓がさきにはいつてかにや、出来んじゃねえか」と答えた。

松次郎も怖<sup>こわ</sup>かったのに違いない。

木之助は虎<sup>とら</sup>の尾でもふむように、びくびくしながら玄關の方へ近づいてゆくと、足はまた自然にとまってしまった。大きな赤犬が、入口の用水桶<sup>ようすいおけ</sup>の下にうずくまってこちらを見ているのだっ  
た。

「松つあん、さき行つてや」と木之助は泣きそうになつていった。

「馬鹿、胡弓がさき行くじゃねえか」と松次郎は吐き出すように

いったが、松次郎の眼めも恐ろしそうに犬の方を見ていた。

二人は戻もどつて行こうかと思つた。しかし五銭のことを思うと残念だつた。そこで木之助が勇氣を出して、一足ふみ出して見た。すると犬は、右にねていたしつぽを左へこてんとかえした。また木之助は動けなくなつてしまった。

五銭は欲ほしかつたし、犬は恐ろしかつたので、二人は進退に困つていると、うしろから誰かがやつて来た。この家の下男げなんのような人で法被はっぴをきていた。木之助たちを見ると、

「小さい門附けが来たな、どうしただ、犬が恐れおそえのか」といつて人が好よさそうに笑つた。犬はその人を見るとむくりと体を起して、尾を三つばかり振つた。その男の人は犬の頭をなでながら、

「よしよし、トラ、おうよしよし」と犬にいい、それから木之助たちの方に向いて、

「この犬はおとなしいから大丈夫だ。遠慮せんではいれ、はいれ」とすすめた。

「おつつあん、しつかり掴つかんどつてな」と松次郎が頼んだ。

「おう、よし」と小父おじさんは答えた。

トラ——恐ろしい名だな、おとなしい犬だと小父さんはいったが嘘うそだろう、と木之助は思いながら立派な広い入口をはいった。

正面に衝つ立いたてが立っていて、その前に三さん宝ぼうが置いてある、古めかしいきれいな広い玄関だった。胡弓や鼓の音がよく響き、奥へ吸いこまれてゆくようで自分ながら気持ちよかった。

この家の主人らしい、頭に白髪しらがのまじったやさしそうな男の人が衝立かげの蔭から出て来て、木之助と松次郎を見ると、にこにこと笑いながら、

「ほっ、二人とも子供だな」といった。

### 三

木之助は、子供だから五銭もやる必要がないなどと思われてはいけないと、一層心をこめて胡弓を弾ひいた。

一曲終ったとき主人は、

「ちよつと休めよ」といった。変に馴なれなれしい感じのする人だ。



松次郎は去年も来て知っていたが木之助は始めてなので妙な気がした。

ちよつと休めよなどと友達にでもいうように心安くいってくれたのはこの人だけである。木之助はぼけんとつつたっていた。五錢はくれないのか知らん。胡弓が下手まずいのかな。

「こつちの子供は去年も来たような気がするが、こつちの（と木之助を見て）小さい方は今年ことしはじめてだな」

木之助は小さく見られるのが癪しやくだったので解わからないようにちよつと背伸びした。

「お前たちは何処どこから来たんだ」

松次郎が自分たちの村の名を言った。

「そうか、今朝<sup>けさ</sup>たつて来たのか」

「ああ」

「昼飯、たべたか」

「まだだ」と松次郎が一人で喋<sup>しゃべ</sup>舌<sup>べ</sup>つた。「弁当持つとるけど、

食<sup>く</sup>べるところがねえもん」

「じゃ、ここで食べていけよ、うまいものをやるから」

松次郎はもそもぞした。五銭はいつくれるのか知らんと木之助は思った。

二人がまだどっちとも決めずにいるうちに、主人は一人できめてしまつて、じゃちよつと待つておれよ、といつて奥へ姿を消した。

やがて奥から、色の白い、眼の細い、意地の悪そうな女中が、手に大きい皿さらを持って出て来たが、その時もまだ二人は、どうしたものかと思案しあんにくれて土間どまにつつまっていた。

女中はつんとしたように皿を式台しきだいの上に置くと、

「おたべよ」と突慥貪つっけんどんにいつて、少し身を退ひき、立ったまま流しめに二人の方を見おろしていた。皿の中にはうまさうな昆布こんぶ巻きや、たつくりや、まだ何かが一ぱいあった。

「よばれていこうよ」と松次郎がいった。木之助もたべたくなつたのでうんと答えて胡弓を弓と一しよにして式台すみの隅の方へそつと置くと、女中は胡弓をじろりと見た。

松次郎と木之助は、はやく女中がひっこんでくれないかなと思

いながら、式台に腰をおろして腰の風呂敷ふろしきつみ包をほどいた。中から竹皮に包まれた握り飯があらわれた。女中はそれも横目でじろりと見た。

食べにかかると握り飯も御馳走ごちそうもすばらしく美味うまいので、女中のことなどそちのけにしてむしやむしや頬張ほおばった。女中はじつとそれを見ていたが、もう忪こらえられなくなつたと見えて、

「まあ汚きたい足」といった。松次郎と木之助は食きたべながら自分の足を見ると、ほんとに女中のいった通りだつた。紺足袋こんたびの上に草鞋わらじを穿はいていたが、砂すな埃ぼこりで真白だつた。二人は仕方ないので黙々と御馳走を手でつまんではたべた。

「まあ、乞食こじきみたい」。しばらくするとまた女中が刺すような声

でいった。指の間にくつついた飯粒を舌の先でとりながら、木之助が松次郎を見ると、いかにも女中がいった通り松次郎は乞食の子のようにうすぎたなく見えた。松次郎もまた、木之助を見てそう思った。

「まあ、よく食べるわ、豚みたい」。木之助が五つ目の握飯をたべようとして口をあいたとき女中がまたいった。木之助は、ほんとにそうだと思つて、ぱくりと喰くいついた。

「耳の中に垢あかなんかためて」。しばらくするとまた女中がいった。木之助は松次郎の耳の中を見ると、果はたして汚く垢がたまっていた。松次郎の方でも木之助の耳の中にたまっている垢をみとめた。

やがて衝ついたて立の向うに、とんとんという足音が聞えて来ると、

女中はついと身を翻<sup>ひるがえ</sup>して何処<sup>どこ</sup>かへ行つてしまい、代りにさっきの優しい主人があらわれた。

「どうだうまいか」といって、主人はそこにかがんだ。松次郎が胸<sup>つか</sup>に問えたので拳<sup>こぶし</sup>でたたいていけると、おやあいつ、お茶を持って来なかつたんだな、いいつけといたのに、と呟<sup>つぶや</sup>いた。そのとき今の女中がお茶を持って来て、すました顔でそこへ置くとまたひっこんで行つた。

「大きな握飯だな、いくつ持つて来たんだ」と主人は一つ残った木之助のおむすびを見ていった。六つと木之助は答えた。この半白の頭をした男の人は、さつきより一層親<sup>したし</sup>くなつたように木之助には感じられた。

木之助たちが喰<sup>た</sup>べ終つて、「ご馳走<sup>ちそう</sup>さん」と頭をさげると、主人はなおも、いろんなことを二人に話しかけ、訊<sup>たず</sup>ねた。これから行く先だとか、家の職業だとか、大きくなったら何になるのだとか。木之助の胡弓は大層うまいとほめてくれた。木之助はうれしかった。「こんど来るときはもつと仰<sup>ぎようさん</sup>山弾けるようにして来て、いろんな曲をきかしてくれや」といったので木之助は「ああ」といった。すると主人は袂<sup>たもと</sup>の底をがさ<sup>さが</sup>ごそと探<sup>さが</sup>していて紙の撚<sup>ひね</sup>つたのを二つ取り出し、一つずつ二人にくれた。

二人は門の外に出るとすぐ紙を開いて見た。十銭玉が一つずつあらわれた。

## 四

木之助は、来る正月来る正月に胡弓をひきに町へいった。行けば必ずあの「味噌溜みそたまり」と大きな板の看板のさがっている門をくぐった。主人はいつも変わらず木之助を歓迎してくれ、御馳走をしてくれた。

木之助は胡弓がしんから好きだったので、だんだんうまくなつていった。始めは牛飼から曲を教わったが、牛飼の知っている五つの曲はじき覚えてしまい、しかも木之助の方が上手じょうずにひけるようになった。するともう牛飼の家に習いにゆくのはやめて、別な曲を知っている人のところへ覚えにいった。隣の村、二つ三つ



向うの村にでも、胡弓のうまい人があるということをしきくと、昼間の仕事を早くしまつて、その村まで出かけてゆき、熱心に頼んで新しい曲を覚えて来た。やがて木之助にも妻が出来、子供も出来たが、夜、木之助の弾ひきならす胡弓の音が邪魔になつて子供が寝つかないというときには、村の南の松林にはいつていつて、明るい月の光で弾いた。そののんびりした音色ねいろは、何事かを一生懸命に物語つてゐるように村人たちには聞えたのである。

だが歳月は流れた。或ある年の旧正月が来たとき、こんども松次郎と一しよに門附けにいらつたと思つた木之助が、前の晩松次郎の家にゆくと風呂ふろにはいつていた松次郎はこういつた。「もうこの頃ころじゃ、門附けは流行はやらんでな。ことしあもう止めよかと思うだ。

五、六年前まで、東京へ行った連中も旅費の外にほか小金を残して戻つて来たが、去年あたりは、何だというじやないか、旅費が出なかつたてよ」

「でも折角せつかく覚えた芸だで腐らせることもないよ、松つあん」と

木之助は励ますようにいった。「東京は別だよ、場所（都会）の人間はあかんさ」

「だが、俺たちも一昨年、去年は駄目だめだったじやねえか。一日、足を棒にして歩いてても一両なかつただもんな。乞食こじきでも知れてるよ」

なおも木之助がすすめると、風呂の下を焚たいていた松次郎のお内儀かみさんがいった。「木之さん、あんたは大人おとなしいから、たとい

五十錢でも貰<sup>もら</sup>えば貰<sup>もら</sup>っただけ家へ持つて来るからええけど、うちの人は呑<sup>の</sup>ん兵衛<sup>べえ</sup>で、貰<sup>もら</sup>ったのはみんな飲んでしまい、まだ足らんで、持つていった銭<sup>ぜに</sup>まで遣<sup>つか</sup>つてくるから困るよ。それで今年もう止<sup>や</sup>めておくれやとわたしから頼<sup>たの</sup>んでいるだよ」

一昨年いざかやの正月も去年の正月も、一日門附けしたあとで松次郎が、酒のきらいな木之助を居酒屋へつれこみ、自分一人で飲んで、ついにはぐでんぐでんに酔<sup>よ</sup>つてしまい、三里の夜道を木之助が抱くようにして歸<sup>かへ</sup>つて来たのを木之助は思い出した。

「一人じゃ行けんしなあ」と木之助が思案<sup>しあん</sup>しながらいうと、松次郎が風呂から出て、「うん。俺も子供の時分から旧正月といえ、門附けにいっとつたで、今更やめたかないが、女房めがああいう

し、実は、こないだ子供めが火箸ひばしで鼓を叩いているうち破つてしまつただよ。行くとなりや、あれも張りかえなきやならぬしな」といった。

木之助は仕方がないので一人でゆくことにきめた。自分の身についた芸を、松次郎のように生かそうとしないことは木之助には解らなかつた。何故なぜそんなことが平気で出来るのか考えて見ても解らなかつた。いかにも年々門付けはすたれて来ている。しかし木之助の奏でる胡弓を、松次郎のたたく鼓を、その合奏を愛している人々が全部なくなつたわけではないのだ。すくな 尠くとも（と木之助はあの金持の味噌屋の主人のことを思った）、あの人は胡弓の音がどんなものかを知っている。

翌朝木之助は早朝に起き、使いなれた胡弓を持って家を出た。

道や枯草、藁積わらぐまなどには白く霜しもが降り、金色にさしてくる太陽の光が、よい一日を約束していたが、二十年も正月といえれば欠かさず一緒に出かけた松次郎が、もうついてはいないことは一抹いちまつの寂しさを木之助の心に曳ひいた。

「木之さん、今年ことしも出かけるかな」。木之助が家の前の坂道をのぼって、広い県道に出たとき、村人の一人がそういつて擦すれちがった。

「ああ、ちよつと行つて来ますだ」と木之助が答えると、

「由よしさあも、熊くまさあも、金きんさあも、鹿しかあんも今年はもう行かねえそうだ。力りきやんと加平かへいが、行こか行くまいかと大分迷つとつたが

とにかくも一ぺん行つて見ようといったよ」

そういつて村人は遠ざかつていった。

## 五

村を出はずれて峠<sup>とうげ</sup>道にさしかかるといつものように背後か

らからがらと音がして町へ通つてゆく馬車が駈<sup>かけ</sup>て来た。木之助は

道のはたへ寄つて馬車をやりすごそうと思つた。馬車が前を通る

とき馭<sup>ぎよ</sup>者台の上を見ると、木之助は、おやと意外に感じた。そ

こに乗っているのは長年見馴<sup>みな</sup>れたあの金<sup>かな</sup>顰<sup>つん</sup>の爺<sup>じい</sup>さんではなく、

頭<sup>ときわ</sup>を時分けにした若い男であつた。金顰の爺さんの息子<sup>むすこ</sup>に違いな

い。顔つきがそっくり爺さんに似ていた。それにしてもあの爺さんはどうしたんだろう、あまり年とつたので隠居したのだろうか。あるいは死んだのかも知れない。いずれにしても木之助は時の移りをしみじみ感じなければならなかった。

しかしその年はまだ全然実入りがなかったのではなかった。金持ちの味噌屋はたのしみに最後に残しておいて、他<sup>た</sup>の家々を午前中廻<sup>まわ</sup>った。お午<sup>ひる</sup>までに――木之助は何軒の家がお礼をくれたかはつきり覚えていた――十軒だった。そしてお礼のお錢<sup>あし</sup>は合計で十三錢だった。最後に味噌屋にゆくと、あの頃からはずっと年とつて、今はいい老人になった御主人が、喘<sup>ぜんそく</sup>息で咳<sup>せ</sup>き入りながら玄関に出て来て、松次郎がいらないのを見ると、おや、今日<sup>きょう</sup>はお前一

人か、じゃまあ上にあがってゆつくりしてゆけと親切にいつてくれた。木之助は始め辞退したが、あまり勧められるので立派な座敷にあがり、そこで所望しやもうされるままに、五つ六つの曲を弾ひいた。主人はほんとうに懐なつかしいように、うむうむとうなずきながら胡弓に耳を傾けていたが、時々苦しそうな咳せきが続いて、胡弓の声の邪魔をした。いつものように御馳走になつた上多たぶんのお礼を頂いて表に出ると、まだ日はかなり高かつたがもう木之助には他をまわる気が起らなかつた。味噌屋の主人にさえ聴いてもらえばそれで木之助はもう満足だったのである。

それからまた数年たつて門附けは益々ますますはや流行らなくなつた。五、六年前までは、遠い越後えちごの山の中から来るといふ、角兵衛獅子かくべえじしの



姿も、麦の芽が一寸位くらゐになった頃、ちらほら見られたけれど、もうこの頃では一人も来ない。木之助の村の胡弓弾きや鼓うちたちも、一人やめ二人やめして、旧正月が近づいたといつても以前のようには胡弓のすすりなくような声は聞えず、ぱんぱんと寒い空気の中を村の外までひびく鼓の音も聞えなかった。これだけ世の中が開けて来たのだと人々という。人間が惻口りこうになったので、胡弓や鼓などの、間まのびのした馬鹿らしい歌には耳を藉かさなくなったのだと人々という。もしそうなら、世の中が開けるということはどういうつまらぬことだろう、と木之助は思ったのである。

木之助の家では八十八歳まで生きた木之助の父親が、冬中ねていたが、ちやうど恰度旧の正月の朝、朝日がうらうらとお宮の森の一番

高い檜ひのきの梢こずえを照し出すころ、恰度天から与えられた生命を終つて枯れる木のように、静かに死んでいった。そのために、数十年来一度も欠かさなかつた胡弓の門附けを、この正月ばかりはやめなければならなかつた。その翌年は、これはまた木之助自身が感冒わづらを患つてうごくことが出来なかつた。味噌屋の御主人が、もう俺おれが来るずらと思つて待つてござるじやろうに、と仰あおむけ向に寝ている木之助は、枕まくら元もとに坐すわつて看病している大きい娘にそう言つては、壁にかかつている胡弓の方を見たのである。

木之助の病氣は癒なおつた。が以前のような曇りのない健康は歸つて来なかつた。以前は持つことの出来た米俵がもう木之助の腕ではあがつて来なかつた。また子供のときから耕たんぼしていた田圃ひの一

畝とうねが、以前よりずっと長くなつたように感ぜられ、何度も腰をのぼし、あおっている心臓のしずまるのを待たねばならなかつた。冬がやって来たとき、死んだ父親を苦しめていたあの喘息ぜんそくが木之助にもおとずれて来た。寒い夜は遅くまで咳がとまらなかつた。しかし今年の正月にはどうあつても胡弓弾きにゆくと、一ひとつ月も前から木之助は氣張きばつていた。味噌屋の御主人にすまんからといった。そして体の調子のよい折を見ては、夜、妻と三番目の娘が、嫁入よめいりの仕度したくに着物を縫かたっている傍で胡弓を奏でた。昼間、藁部屋わらべやの陽南ひなたで猫ねこといっしょに陽ひにぬくとまりながら、鳴らしているときは、木之さんも年を喰つたと村人が見て通つた。

正月の前の晩はひどい寒氣だつた。その日は朝から雪が降りづ

めで、夜になつて漸くようややんだ。夜はまた木之助の咽喉のどがむずがゆくなり咳が出て来た。裏の竹たけやぶ藪で、竹から雪がどさつどさつと落ちる音が、木之助の咳にまじつた。咳の長いつづきがやむと娘が、

「お父とつつあん、そんなふうで明日門あした附けにゆけるもんかい」といった。もう昼間から何度も繰り返している言葉である。

「行けんじやい！」と木之助は癩かんしやく癩くを起して呶鳴どなるようにいった。「おツタのいう通りだ」と女房もいった。

## 六

「無理して行つて来て、また寝こむようなことになる、僅かなわずぜにかね  
錢金にや代らないよ」。そして女房は、去年木之助が感冒を患  
つたとき、町から三度自動車で往診に來たお医者、鶏とりならこれ  
から卵を産もうという一番値ねのする牝めんどり鶏を十羽買えるだけのお  
錢あしを払わねばならなかつたことをいつた。

「明日あしたは、ええ日になるだ」。木之助はあれ以来女房や娘に苦勞  
をかけているのを心の中では済まなく思つて、それでも負け惜し  
みをいつた。「雪の明けの日というものは、ぬくといええ日にな  
るもんだよ」

「雪が解けて歩くに難儀だよ」と女房がいつた。「そげに難儀し  
て行つたところで、今いまどき時、胡弓など本氣になつて聴いてくれる

ものはありやしないだよ」

木之助は、女房のいう通りだと悲しく思った。だが、味噌屋の旦那だんなの旦那だんなのことを頭にうかべて、

「まだ耳のある人はあるだ。世間は広いだよ」

と答えた。娘のおツタは待針まちばりでついた指の背を口にふくみなが

ら、勝つあんもやめた、力さんもやめたと、門附けをやめてしま

った人々の名をあげてしまいに「いつまでも芸だの胡弓だのい

ってるのはお父とつつあん一人だよ。人が馬鹿だというよ」といった。

「こけでもこけずきでもええだ。聴いてくれる人が一人でもこの

娑婆しゃばにあるうちは、俺おれあ胡弓はやめられんよ」

しばらくみんな黙っていた。竹藪でどさつと雪が落ちた。

「お父つあんも氣の毒な人だよ」と女房がしんみりいった。

「もうちつと早くうまれて来るとよかつただ、お父つあん。そうすりや世間の人はみんな聴いてくれただよ。今じゃラジオちゅうもんがあるから駄目さ」

木之助は話しているうちに段々あきらめていった。本当に女房や娘のいう通りだろう。世間が聴いてくれなくなつた胡弓を弾きに雪の道を町まで行くなどはこけの骨頂こつちようだろう。それでまた感冒にでもなつて、女房たちにこの上の苦勞をかけることになつたらどんなにつまらないだろう。眠りにつく前、木之助はもう、明日町へゆくことをすっかり諦めていた。

夜が明けて旧正月がやって来たが、木之助にとってはそれは奇

妙な正月だった。三十年来正月といえは胡弓を抱かえて町へ行つた。去年と一昨年はいかなかつたが、父親の死と、木之助の病氣というものが余儀なくさせたのである。ところがこんどはこれという理由もないのだ。第一今日一日何をしたらいいのだろう。

天気は大層よかつた。雪の上にかつと陽がさして眩まぶしかつた。

電線にとまつた雀すずめが、その細い線の上に積つていた雪を落すと、

雪はきらきら光る粉こになつて下の雪に落ちた。外の明るい反射が

家の中までさしていた。木之助は胡弓を見ていた。それから柱はしら

時計どけいを見た。午前九時十五分前。遠くからカンカンと鐘かねの

音おとが雪の上を明るく聞えて来た。小学校が始まつたのだ。

木之助はまた胡弓を持って町へゆきたくなつた。こんな風のな



い空気の清澄せいちょうな日は、一層よく胡弓が鳴ることを木之助は思うのであつた。そうだ、ゆこう。こけでも何でもいいのだ、この娑婆に一人でも俺の胡弓を聴いてくれる人があるうちは、やめられるものか。

女房や娘はいろいろ言つて木之助をとめようとしたが駄目だつた。木之助の心は石のように固かつた。

「それじやお父つあん、町へいったらついでに学用品屋よしたで由太に王様クレヨンを買つて来てやつてな。十二色ほのが欲しいとじつと（いつも）言つてゐるに」と女房はあきらめていった。「そして早はよう戻つて来こにやあかんに。晩になるときつと冷えるで。味噌屋がすんだらもう他所よそへ寄らんでまっすぐ戻つておいでやな」

女房のいうことは何もかも承知して木之助は出発した。風邪をひかないようにほつぽこ頭巾ずきんをすつぽり被りかぶ、足にはゴムの長靴ながぐつを穿はいて。何という変てこな恰好かっこうの芸人だろう。だが木之助には恰好などはどうでもよかった。久しぶりに胡弓を弾きに出られることが非常なよろこびだったのだ。

正月といつても村から町へゆく者はあまりなかった。道に積つた雪の上の足跡あしあとでそれがわかる。二人の人間の足跡、自転車の輪のあとが二本、それに自動車の太いタイヤの跡が道の両側についていた。五、六年前から、馬車の代りに走るようになった乗のり合自動車いじどうしゃが朝早く通つたのである。

陽ひが生き物のように照っていた。道のわきの田んぼに鳥からすが二羽

おりているのが、白い雪の上にくつきり浮かんで見えた。静かなあと、思つて木之助はとつと歩いた。

## 七

町にはいった。

木之助は一軒ずつ軒づたいに門かどづ附けをするようなことはやめた。自分の記憶をさぐつて見て、いつも彼の胡弓をきいてくれた家だけを拾つて行つた。それも沢たくさん山はなく、味噌屋をいれて僅わずか五、六軒だつたにすぎない。

だがそれらの家々を廻まわりはじめて四軒目に木之助は深く心の内

に失望しなければならなかった。どの家も、申しあわせたように木之助の門附けを辞ことわつた。帽子屋では木之助が硝子戸ガラスドを三寸ばかり明けたとき、店の火鉢ひばちに顎あごをのせるようにして坐すわっていた年寄りの主人が瘦やせた大きな手を横に振つたので木之助は三寸あけただけでまた硝子戸をしめねばならなかった。また一昨々年まで必ず木之助の門附けを辞あらなかつた或るしもた家やには、木之助があげようとして手をかけた入口の格子こうし硝子に「諸芸人、物貰ものもらい、押売ゆすりり、強請ゆすり、一切おことわり、警察電話一五〇番」と書いた判紙はんしが貼はつてあつた。また或る店屋では、木之助が中にはいって、ちよつと胡弓を弾いた瞬間、声の大きい旦那だんなが、今日はごめんだ、と怒鳴りつけるような声で言つたので、木之助はびくつとして手

をとめた。胡弓の音もびつくりしたようにとまってしまった。

もうこれ以上他を廻るのは無駄であると木之助は思った。そこで最後のたのしみにとっておいた味噌屋の方へ足を向けた。

門の前に立った時木之助はおやと思った。そこには見馴れた古い「味噌溜」の板看板はなくなり、代りに、まだ新しい杉板に

「※味噌醬油製造販売店」と書いたのが掲げられてあった。そ

れだけのことで、木之助にはいつもと様子が変わったような、うとましい気がした。門をくぐってゆくと、あの大きい天水桶はなくなっていた。そして天水桶のあったあたりには、木之助の嫌いな、オート三輪がとめてあった。

「ごめんやす」とほっぽこ頭巾をぬいで木之助は土間にはいった。

奥の方で、誰か来たよといっているのが静けさの中をつつぬけて来た。やがて誰かが立つてこちらへ来る気配がした。木之助はちよつと身繕みづくろいした。だが衝立ついたての蔭かげから、始めて見る若い美しい女の人が出て来て、そこに片手をついてごんだときはまた面くらった。

「あのう」といって木之助は黙った。言葉がつづかなかつた。それから一つ咳せきをして「ご隠居は今日はお留守るすでござえますか。毎年ごひいきに預っています胡弓弾きが参りましたと仰有おっしゃって下せえまし」といった。

女の人が引つ込んでいって、低声こゝろえで何か囁ささやきあっているのが、心臓の高鳴りはじめた木之助の神経を刺戟しげきした。やがてまた足音

がして、こんどは頭をぴかぴかの時分けにし、黒い太い縁の眼鏡をかけた若主人が現われた。

「ああ、また来ましたね」と木之助を見て若主人はいった。「君、知らなかったのかね、親父は昨年おやじの夏なくなつたんだよ」

「へっ」といって木之助はしばらく口がふさがらなかった。立っている自分に、寂しさが足元から上つて来るのを、しみじみ感じながら。

「そうでござえますか、とうとうなくなりましたか」。やっと気を取り直して木之助はそれだけいった。

木之助はすごすごと踵くびすをかえした。闕しきに躓つまずいて、も少しで見苦しく這はいつくばうところだった。右足の親指を痛めただけで胡弓

をぶち折らなかつたのはまだしも仕合わせというべきだつた。

門を出ると、一人の風呂敷包みを持った五十位くらゐの女が、雪駄せつたの

齒につまつた雪を、門柱の土台石にぶつけて、はずしていた。木

之助を見ると女の人は、おや、と懷なつかしそうにいった。木之助は見

て、その人がこの家の女中であることを知つた。彼女は三十年前、

木之助が始めて松次郎と門附けに来たとき、主人にいいつけられ

て御馳走ごちそうのはいった皿さらを持って来た、あの意地いきたの汚なかつた女中

である。来る年も来る年も木之助は彼女を味噌屋の家で見た。木

之助が少年から大人おとなへ、大人からやがて老人へと成長し年とつて

いったように、彼女は見る年ごとに成長し年とつていった。二十

五位のとき彼女は一度味噌屋から姿を消し、それから五、六年は



見えなかったが、再び味噌屋へ戻つて来た時は一度に十も年をとつたように老<sup>ふ</sup>けて見えた。その時彼女は五つ位になる女の子を一人つれて来た。木之助は御隠居から、彼女の身の上を少しばかりきかされた事があつた。彼女は不仕合わせな女で一度嫁<sup>とつ</sup>いだが夫に死なれたので、女の子をつれてまた味噌屋へ奉公に戻つて来たのだそうである。その時以来彼女はずっとこの家から出ていなかった。若かつた頃は意地が悪くて、木之助を見ると白い眼をして見下したが嫁いだ先で苦労をして戻つてからは、人が變つたように大人<sup>おとな</sup>しくなつたのである。

「お前さん、しばらく見えなかっただね、一昨年おとしの正月も昨年おとしの正月もなくなられた大旦那おおだんなが、あれが来ないがどうしたろうと言つておらしたに」

「ああ、去年は大病おおよみをやり、一昨年は恰度ちやうど旧正月の朝親父が死んだもので、どうしても来られなかっただ。御隠居も夏死なしたそうだな。俺おれあ今きいてびっくりしたところだよ」と木之助はいつた。

「そうかね、お前さん知らなかっただね」と年とつた女中はいつて、それから優しく咎とがめるような口調で言葉をついだ。「去年の正月はほんとに大旦那はお前さんのことを言つておらしただに。」

どうしよっただろう、もう門附けなんかしてもつまらんと  
止めよつただろうか、病氣でもしていやがるか、つてそりや氣に  
して見えただよ」

木之助は熱いものがこみあげて来るような氣がした。「ほうか  
な、ほうかな」といつてきいていた。

年とつた女中はそれから、もう一ぺんひつ返して、大旦那の御  
仏前で供養に胡弓を弾くことをすすめた。「それでも、若い御

主人が嫌うだろ」と木之助がしりごむと、女中は、「なにが。わ

たしがいるから大丈夫だよ」と言つて木之助をひっぱつていった。

女中は木之助を勝手口の方から案内し、ちよつとそこに待たせ  
ておいて奥へ姿を消したが、直また出て来て、さあおあがりな、

と言った。木之助は長靴をぬいで女中のあとに従つて仏間<sup>ぶつま</sup>にいった。仏壇は大きい立派なもので、点<sup>とも</sup>された蠟燭<sup>ろうそく</sup>の光に、よく磨<sup>みが</sup>かれた仏具や仏像が金色にぴかぴかと煌<sup>きらめ</sup>いていた。木之助はその前に冷えた膝<sup>ひざ</sup>を揃<sup>そろ</sup>えて坐<sup>すわ</sup>ると、焚<sup>た</sup>かれた香<sup>こう</sup>がしめつぽく匂<sup>にお</sup>った。南無阿弥陀仏<sup>なむあみだぶつ</sup>と唱えて、心から頭をさげた。深い仏壇の奥の方から大旦那がこちらを見ているような気がしたのである。

「せいじゃ、何か一つ、弾いてあげておくれやな」と背後に坐っていた女中がいった。木之助は今までに仏壇<sup>むか</sup>に向つて胡弓を弾いたことはなかったので、変なそぐわない気がした。だが思い切つて弾き出して見ると、じきそんな気持ちは消えた。いつ弾く時でもそうであるように、木之助はもう胡弓に夢中になつてしまった。

木之助の前にあるのはもう仏壇というような物ではなかった。耳のある生物だった。それは耳をそばだてて胡弓の声にきき入り、そののんびりしたような、また物哀もののかなしいような音色ねいろを味わっていた。木之助は一心にひいていた。

門を出ると木之助は、道の向う側からふりかえって見た。再びこの家に訪ねて来ることはあるまい。長い間木之助の毎日の生活の中で、煩わづらわしいことや冗つまらぬことの多い生活の中で竜宮城のように楽しい想いおもであつたこの家もこれからは普通の家になつたのである。もはやこの家には木之助の弾く胡弓の、最後の一人の聴きき手がいないのである。

木之助はすっぱりほっぱこ頭巾をかむって歩き出した。町の物

音や、眼の前を<sup>ゆ</sup>行き交<sup>か</sup>う人々が何だか遠い下の方にあるように思われた。木之助の心だけが、群<sup>むれ</sup>をはなれた孤独な鳥のように、ずんずん高い天へ舞いのぼって行くように感ぜられた。

ふと木之助は「鉄道省<sup>はらいさ</sup> 払<sup>はらい</sup>下げ品、電車中遺留品、<sup>ふるもの</sup>古物」と書かれた白い看板に眼をとめた。それは街<sup>まち</sup>角<sup>かど</sup>の、外<sup>そと</sup>から様々な古物の帽子や煙草<sup>たばこ</sup>入れなどが見えている小さい店の前に立っていた。木之助は看板から自分の持つてゐる胡弓に眼をうつした。聴く人のなくなつた胡弓など持つてゐて何になろう。

誰かに逆<sup>さか</sup>うように、深くも考えずに木之助はその硝子<sup>ガラス</sup>戸<sup>ど</sup>をあけた。

「これいくらで取つてもらえるだね」

青くむくんだ顔の女主人が、まず、

「こりや一体、何だい。三味線しやみせんじゃない。胡弓か、えらい古い

物だな」と男のような口のきき方をして、胡弓をうけとった。そして、あちこち傷いたんでいないか見てから、

「こんなものは、買えない」とつき返した。

「買えんということはねえだろうがな」と木之助は気が立っていったので口をとがらせていった。「古物屋が古物を買えんという法はねえだら」

「古物屋だとて、今どき使わんようなものはどうにもならんよ。うちこつとうやは骨董屋じゃねえから」

二人はしばらく押問答おしもんどうした。女主人は買わぬつもりでもない

らしく、

「まあ、そうだな。三十銭でよかつたら置いてゆきな」といった。

## 九

木之助はあまり安い値ねをいわれたので腹が立ったが、腹立ちまぎれに、そいじや売ろうといつてしまった。木之助は外に出ると何だかむしように腹が立ったが、その下にうつろな寂さびしい穴がぽかんとあいていた。

少しゆくと鉄柵てつさくでかこまれた大きい小学校があつて、その前に学用品を売る店が道の方を向いていた。末っ子の由太のために



たのまれた王様クレヨンを買った。小僧がそれを包み紙で包むのを待っている間に、木之助の心は後悔の念に噛かまれはじめた。胡弓を手ばなした瞬間、心の一隅いちぐうに「しまった」という声が出た。それが、今は段々大きくなって来た。

クレヨンの包みを受けると木之助は慌あわてて、ゴムの長靴ながぐつを鳴らしながら、さっきの古物屋の方へひつかえしていった。あいつを手離してなるものか、あいつは三十年の間私につれそうて来た！

もう胡弓が古帽子や煙草入れなどと一緒に、道からよく見えるところに吊つるしてあるのが、木之助の眼に入った。まだあつてよかったと思つた。長い間逢あわなかった親しい者にひよいと出逢つた

ように懐<sup>なつか</sup>しい感じがした。

木之助は店にはいつて行つて、ちよつと躊躇<sup>ためら</sup>いながら、いった。「ちよつと、すまないが、さっきの胡弓は返してくれのかな。ちよつと、そのう、都合の悪いことが出来たもんで」

青くむくんだ女主人は、きつい眼をして木之助の顔を穴のあくほど見た。そこで木之助は財布<sup>さいふ</sup>から三十銭を出して火鉢<sup>ひばち</sup>の横にならべた。

「まことに勝手なこといつてすまんが、あの胡弓は三十年も使つて来たもんで、俺<sup>おれ</sup>のかかあより古くから俺につれそっているんで」女主人の心を和<sup>やわ</sup>げようと思つて木之助はそんなことをいった。すると女主人は、

「あんたのかかあがどうしたただか、そんなこたあ知らんが、家あうち商売してるだね。遊んでゐるじゃねえよ」といつて、帳面や算そろば盤ばんの乗っている机に頤あごづえ杖をついた。そしてまたいった。「買いとつたものを、おいそれと返すわけにやいかんよ」

これはえらい女だたと木之助は思いながら「それじゃ、売ってくれや、いくらでも出すに」といった。

女主人はまたしばらく木之助の顔を見ていたが、

「売ってくれというなら売らんことはないよ、こっちは買つて売るのが商売だあね」とちよつとおとなしく言つた。

「ああ、そいじゃ、そうしてくれ。いやどうも俺の方が悪かつた。それじゃもういくら上げたらいいかな」と木之助はまた財布を出

して、半ば開いた。

「そうさな、他の客なら八十銭に売るところだが、お前さんはもとを知つとるから、六十銭にしとこう」

木之助の財布を持っている手が怒りのために震えた。

「そ、そげな、馬鹿なことが。あんまり人の足元を見やがるな。

三十銭で取つといて、三十分とたたねえうちに倍の値で——」

「やだきや、やめとけよ」と女主人は遮って素気なくいった。

木之助は財布の中を見るともう十五銭しかなかった。いつもの習慣で家を出るとき金を持って出なかった。で、さつき由太のクレヨンを買うときは、味噌屋で貰ったお銭で払ったのだ。十五銭はその残りだった。

火鉢の横にならべた三十錢を一枚一枚拾って財布に入れると、木之助は黙って財布を腹の中へ入れた。そして力なく古物屋を出た。

午後の三時頃だった。また空は曇り、町は冷えて来た。足の先の凍えが急に身に沁<sup>し</sup>みた。木之助は右も左もみず、深くかがみこんで歩いていった。



# 青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集第三卷」大日本図書

1980（昭和55）年7月31日初版第1刷発行

初出：「哈爾賓日日新聞」

1939（昭和14）年5月17日～5月27日

入力：浜野 智

校正：浜野 智

1999年3月1日公開

2012年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 最後の胡弓弾き

新美南吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>